

くじら街とフィッシャーさんの路面電車の物語



柳原 望 野中健一

『くじら街とフィッシャーさんの路面電車の物語』

ここはとある小さな欧州の港街。人々からは親しみを持ってくじら街と呼ばれています。海の風を街中に運ぶように、小さな路面電車が港と街から離れた丘の上の国鉄駅を結んでいます。港から海沿いの住宅街を抜けて行くと古い中世の趣を残した商店街。その向こうには教会のある中央広場。教会の裏にはかつて鯨漁で栄えたことを伺わせる古びた鯨のモニュメントがひっそりと立っています。電車は広場から学校や役所の建物を縫うように通りぬけ国鉄駅へと辿り着きます。路面電車は約8km程の区間を30分かけて走ります。毎日一時間に一往復きっちり同じ時刻に通るので、時計代わりにしている街の人もあるくらいです。この几帳面さは路面電車を作ったフィッシャーさんの性格そのものだと言われ、街の人は親しみを持って語ります。今回は、このくじら街とフィッシャーさんの路面電車のお話をしましょう。



フィッシャーさん一家のおじいさん、ヨセフさんの時代この街は鯨漁で大変栄えていました。鯨の油は当時とても重宝されていました。南氷洋で捕獲された鯨から作られた鯨油の樽がひっきりなしに陸揚げされ、鉄道駅まで油樽を運ぶ馬車の列が途切れる事がなかったそうです。



さて、鯨漁で財を築き、フィッシャー家は街の名士となりました。ヨセフさんの息子であるハンスさんはその恵まれた身分を利用し、若い頃から世界各地の鯨漁の街を尋ね歩き、街の発展について考えて来ました。そして、古くから鯨漁の伝統のある日本に立ち寄った際、そこで通訳をしてくれた聡明な日本人女性に恋をしました。彼女の名前はあけみさん。実家が鯨齒で工芸品を作っている家の女性でした。ハンスさんはあけみさんから鯨のすべての部分を利用する日本の鯨漁を学び大きな感銘を受けました。欧州の鯨漁は油の採取が目的だったので、鯨肉や骨は家畜の飼料や肥料にするか海に捨てられてしまっていたのです。ハンスさんは自分の街もくじらを利用したさまざまな産業を興せるのではないかと考えました。

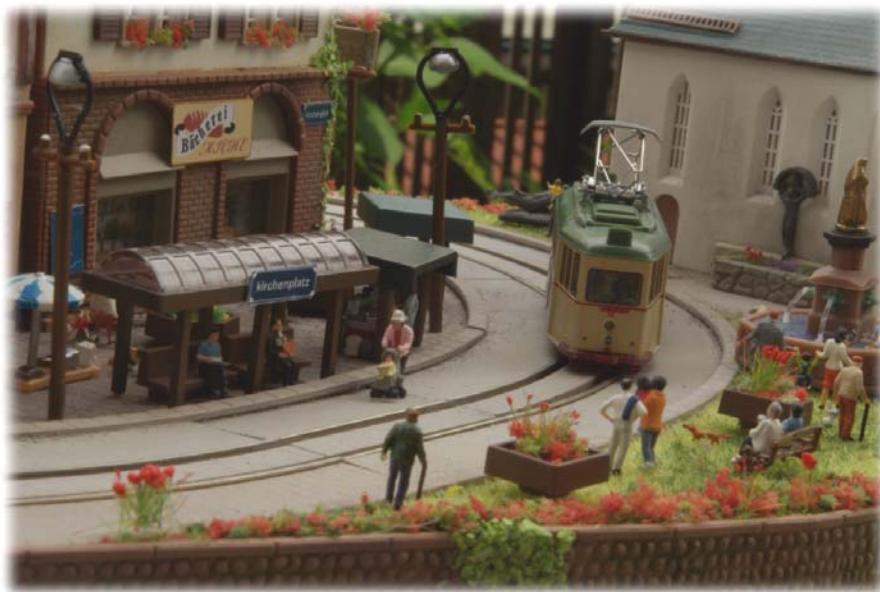
後にハンスさんは日本で自分の未来を得たと語っています。実際、ハンスさんは生涯のパートナーとなるあけみさん、そして一人息子のイサナくんを日本で授かったのです。ちなみにイサナとは日本での鯨の古い呼び方である「勇魚」からもらったものです。この名前がその後ちょっとした問題になるのですが、それはまた後ほど。

ハンスさんは約3年日本に滞在した後、故郷へ帰り父のヨセフさんの事業を受け継ぎました。もちろん傍らにはあけみさんとイサナくんが寄り添っていました。ヨセフさんはその時、すでに死の床にあり、自分の孫をうれしそうに抱いて息を引き取ったそうです。

一人息子のイサナくんは幼い頃は身体が弱く、週に一度は街の反対側にある医者に通わねばならない身でした。しかし人見知りが激しいイサナくんは週に一度のおでかけをとてもしやがりました。

ちょうどその頃、港から国鉄駅まで鯨油を運ぶ手段が馬車から自動車に変わりつつありました。ハンスさんは馬に変わってトラックを大量に購入するかどうかを考えました。その時思い浮かんだのが日本で見た単線の電気鉄道です。イサナくんは電車が大好きでした。毎日、電車が通る時間になると、お散歩をせがむ子供でした。ハンスさんはイサナくんの為に、馬車道を利用して街を横切って港から国鉄駅を結ぶ鉄道を敷いて貨物とともに路面電車を走らせる事を思いつきました。これできっとイサナくんもお出かけをいやがる事はないだろう。路面電車なら街の人も気軽に利用してくれるに違いない、と。

街に路面電車を走らせるという事は、いくら名士であるフィッシャー家の望といえども簡単なことではありませんでした。歓迎する人もいましたが、道路が狭くなったり、家の移転をお願いする人は当然難色を示します。ハンスさんは几帳面に路面電車を通す予定の道沿いの家を一軒一軒回って、説明をして回りました。あけみさんもイサナくんをお手伝いさんに預け、ハンスさんにとともに家々のドアを叩きました。街の人は最初、見知らぬ遠い東洋の国からやって来たあけみさんにとまどっていました。路面電車の説明を受けるとともに、あけみさんが自分たちと同じ鯨漁を生業とする土地からやって来た事を知ると、だんだんと打ち解けるようになって来ました。こうして、自分がこの街に溶け込むきっかけとなった路面電車にあけみさんも特別な思い入れを抱くようになるのです。

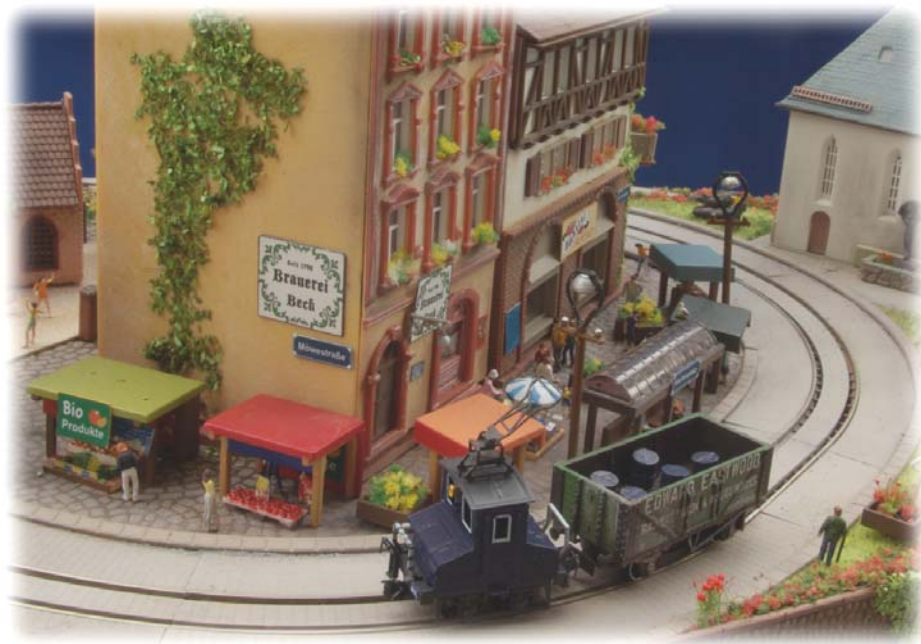


とうとうハンスさんは街を通して港まで路面電車を引く事に成功しました。路面電車も貨物を引っ張る電気機関車も他の街からの払い下げの中古でしたが、この小さな街を往復するには十分でした。

ハンスさんは、路面電車がはじめて街を走った日を忘れることができません。あれほど外出を嫌っていた息子が目を輝かせて笑ったこと。街の人たちも港へ通うのに楽になったと喜んでくれたこと。何よりその人たちの輪の中にあけみさんとイサナくんが笑顔で溶け込んでいたこと。ハンスさんにとってまさに人生最高の日でした。ハンスさんはこの日の記念に教会の裏にくじら街のシンボルとなるくじらのモニュメントを造りました。



イサナくんも小学校へ上がり、身体もだんだんと丈夫になりました。イサナくんにかからなくなったあけみさんは、港駅の前のパブの一角を間借りして鯨の歯や骨を利用した工芸品を作ったり教室を開いたりする「くじらの店」を作りました。ハンスさんは貨物用の電気機関車をくじら色に塗りました。不定期にくじら油を運ぶ電気機関車は、くじら街の中を回遊するくじらのように見えて子ども達にくじら列車と慕われました。ハンスさんは日本で抱いた夢、くじら街をくじら文化の街にするという夢に向かって着々と歩んでいました。



この頃のフィッシャーさん一家は路面電車の時間が家族の時計代わりでした。まず、朝7時台の上り列車にイサナくんを乗せます。お寝坊のイサナくんを列車に間に合わせるのは毎日あけみさんの大仕事です。イサナくんは上り列車に乗って、街の中心の鯨像のある教会駅を通り過ぎ、学校前駅で降ります。電車の中でつい居眠りをしてしまって、終点の国鉄駅まで何度か乗り過ごしてしまった事はイサナくんと運転手さんのヒミツです。イサナくんを学校まで送った列車はそのまま下り列車となって再び街を通り抜けフィッシャー家の前でハンスさんとあけみさんを乗せて終点港駅へ向かいます。イサナくんを送り出して下りの列車がやってくるまでのほんの数十分がハンスさんとあけみさんの大切な夫婦の時間です。二人は丁寧に入れたお茶を二人で分け合って一日の話をしたものです。そうこうするうちにやって来た列車に乗ってあけみさんは「くじらの店」へ、ハンスさんは港の事務所へ向かうのです。イサナくんは学校が終ると再び路面電車に乗って今度は家の前を通り過ぎ終点の港駅へ向かいます。そうして夕方まで宿題をしたりおやつを食べたりしながらあけみさんのお店で過ごすのです。やがてハンスさんが仕事を終えてあけみさんの店へやって来ると、あけみさんはお店を締めます。ちょうどやってくる夕方5時台の上り列車に乗って港駅から家族三人で家路につくのです。これがフィッシャーさん一家のこの頃の日課になりました。



イサナくんは小学校2年生の時、ちょっとつらい出来事が起きました。イジメです。1年生の時はまだ身体が弱く休みがちだったイサナくんは友達を作りそびれてしまいました。そのまま2年生に上がったのですが、ハーフの顔立ちとイサナという珍しい名前が目を引いて、クラスメイトのイジメの対象となってしまったのです。この時からイサナくんは鯨から取った自分の名前にあまりいい印象を持てなくなってしまいました。お店が忙しいあけみさんはあまり学校行事に参加できなくて、そのこともイサナくんの小さな心の傷になりました。学校がおもしろくないイサナくんにとって、路面電車が通り過ぎる音を数えることがただ一つの救いでした。毎日同じ時間、同じ回数通り過ぎる路面電車は、あと何回通り過ぎたら家に帰れるとイサナくんに告げてくれる存在でした。



鯨油が重宝された時代は終り、鯨油に代わって石油が広く使われるようになりました。鯨漁で栄えたフィッシャー家も鯨に代わって魚を扱い何とか生き延びを図るようになりました。港から国鉄駅に物資を運ぶことを目的に作られた路面電車は、港近辺の新興住宅地から国鉄駅へ人々を運ぶことへと役目が変わっていました。港で仕事を持つ人々がどんどん減り、みんな国鉄駅の先にある都市へと仕事の場所を移して行ったのです。朝と夕方、勤めに行く人と帰る人を吐き出すと、昼の間は路面電車は空っぽの身体で街の中心を行ったり来たりするようになりました。何度か昼間の運行本数を減らそうという案も出ましたが、ハンスさんはそれを受け入れませんでした。ハンスさんとあけみさんが二人で路面電車導入をお願いして回った人たちがちょうど初老に差しかかり、生活の大切な足としてその昼間の路面電車を利用するようになっていたからです。あけみさんはハンスさんに「一時間に一本の電車は、街の心臓の鼓動みたいね。鼓動が少なくなったら街が死んでしまいそう」と言いました。その言葉はハンスさんに路面電車を運行しつづける勇気をくれました。

そうしてハンスさんにとって最もつらい時代が始まりました。世界的な捕鯨反対の流れです。すでにくじら街の鯨漁は過去のものになりつつあったのですが、ハンスさんが作ったくじら文化の街というイメージが悪い方へ転んでしまいました。くじら街が捕鯨反対運動のやり玉にあげられてしまいました。

特にくじら街近くの大学の学生たちが反対運動の急先鋒になりました。自然保護の美辞麗句の元、純粋な学生たちは極端に走ってしまったのです。そうしてその中に大学生になったイサナくんもいました。鯨へのあまりよくない思い出から、イサナくんは自分の出身を隠してその反対グループの一員になってしまっていたのです。

学生運動は日に日に声高になり、くじら街へのいやがらせも多くなりました。ハンスさんが寄贈した教会の裏のくじらモニュメントは落書きされ、「くじらの店」のガラスが割られました。あけみさんは逃げて行く学生たちの後ろ姿の中に我が子の姿を捉えました。イサナくんもあけみさんに気づかれてしまったと感じていました。しかし、ハンスさんもあけみさんもイサナくんには何も言わず気づかないふりをしていました。小さい頃から仕事を優先して、イサナくんに寂しい思いをさせてしまっていた事を二人はよくわかっていたからです。しかし、二人から何も言葉をもらえなかったイサナくんは逆に見捨てられたのではないかと孤独を感じてしまいました。そうして、ますます学生運動にのめり込んで行きました。

そんな日々を重ねるうちに街の人たちの不安も高まり、くじらの街というイメージを隠したらどうかと言うようになりました。日本人であるあけみさんは鯨漁の文化にとっても誇りを持っていました。あけみさんは根気よく鯨漁反対運動の考えやその根拠になった資料などを調べました。そうして反対運動は必ずしも根拠があるものではなく、考え方の違いから来るものだとなりました。あけみさんは、自分の調べた事や考えを書いたちらしを作り、街の人たちの所を一軒ずつ回ったり、路面電車の中で一人一人に話しかけたりしました。今度は夫のハンスさんがあけみさんの傍らに寄り添いました。中には罵声を浴びせる人や係わり合いになりたくないと言う人もいましたが、理解を示してくれる人もいました。二人は根気よく自分たちの街に自信を持とうと呼びかけてまわりました。自分たちはイサナくんを傷つけてまでくじらの街と鯨文化を大切にしていたのです。ここでくじけてしまえばイサナくんの傷が無意味になってしまいます。そんな思いも強かったのです。一方両親の行動を知ったイサナくんは、両親に無言で責められていると思ったのです。イサナくんとフィッシャーさん夫妻のお互いに思い合っているがゆえのボタンの掛け違いでした。



そんなフィッシャー夫妻の行動を知っておもしろくないのは反対運動の学生たちです。とうとう、ハンスさんの家を襲撃しようという話になりました。イサナくんは驚きました。何度も迷いましたが意を決して実家に戻り、両親にその事を話しました。学生たちは最終の路面電車を使って家にやってくるつもりだから、その日だけでも路面電車を止めてくれ、とイサナくんは訴えました。路面電車を止めれば商店街の先にあるフィッシャー家まで歩いて行かなければなりません。排斥運動の学生たちは街の先々で狼藉を働くでしょう。でもそうなれば、フィッシャー家に行き着く前にある程度満足したり警察への通報がなされたりして、この家が襲われる可能性が少なくなる、と思ったのです。

しかし、ハンスさんは路面電車を止める事を受け入れませんでした。街の鼓動を止めてはいけない、と。ただ、イサナくんには謝罪の言葉と感謝の言葉を伝えました。今まで寂しい思いをさせて来て悪かった、と。だからイサナくんが捕鯨反対運動に入る気持ちも分かる、と。それなのに仲間を裏切ってまで知らせに来てくれてありがとう、と。気持ちに応えられなくて悪かった、と。だけどそんなお前を誇りに思う、と。何度も何度も謝罪と感謝をくり返しました。イサナくんは自分の中で何かが溶けて行くことを感じました。

「せめて警察を呼んで欲しい」と訴える息子に、「そんな事をしたら必ず仲間の中に裏切り者がいると探し出すだろう。お前が何処の誰か調べればすぐにわかってしまう。そうしたらお前が仲間からひどい目にあう」とハンスさんは言いました。彼らはきっとそうするだろうとイサナくんは思いました。息子を守るために我が身を顧みない両親と、自分を制裁するだろう仲間たち。その時、ようやくイサナくんは自分が加わっている集団がどれだけのかわかしかしいかという事に気づきました。

結局、イサナくんは警察を呼びました。学生たちは両親に手を出す事なく警察に連行されました。その後、ハンスさんの言った通りイサナくんの正体が仲間たちにバレてイサナくんは仲間からひどい暴力を受けました。命からがら鉄道に乗り込み、なんとかくじら街にたどりつきました。そうしてそこで気を失ってしまったのです。

気がついたのは早朝、日が昇る前でした。イサナくんはボロボロの身体を引きずりながら家へ向かって歩き出しました。途中で港を出発した始発の路面電車とすれ違ったので、今何時かがわかりました。しばらくして、後ろからやって来た路面電車がイサナくんの横で止まりました。国鉄駅を出発した下りの始発電車です。正確が信条の路面電車が途中で止まるなんてあってはならないことなのに、と驚きました。見ると、イサナくんが小さな頃から顔見知りだった運転手さんがいました。運転手さんはイサナくんに路面電車に乗りなさい、と手

で合図しました。イサナくんは鉄道で所持金を使い切っていたので、乗れないと言いました。あんなに傷つけた街の象徴である路面電車に世話になるのは恥ずかしいという気持ちがあったのです。それでも運転手さんはイサナくんに乗りなさいと強く言いました。イサナくんはさすがに身体がつかったので、電車に乗り込みました。車内にはイサナくんだけでした。



イサナくんは誰もいない車内の椅子にごろんと寝転びました。路面電車の音がイサナくんを優しく包みました。小さな頃から乗り馴れた電車なので、音と身体の揺れで今どこを走っているのかがわかりました。イサナくんはこの電車に乗って病院へ通ったことや、学校へ通ったことなどを思い出しました。鯨像のある教会の前を通り過ぎる時、身体を持ち上げて外の風景を眺めました。痛々しく落書きされ、拭き取られた跡がありました。毎週日曜日、教会へ通うたびうれしそうに誇らしそうに路面電車を走らせた時の話をしていた両親の笑顔を思い出しました。イサナくんは今までの自分の行動が心底恥ずかしくなって来て泣きました。ただし、運転手さんに気づかれないように声を殺して。

くじら街の国鉄駅発の路面電車は運行以来はじめてほんの少し遅れて終点の港に着きました。運転手さんは何も言わず、自分の財布からイサナくんの分の運賃を運賃箱に入れました。ハンスさんといいくじら街の路面電車に係わる人たちは本当に几帳面なのです。駅に降り立ったイサナくんはもう泣いていませんでした。港駅から鉄道駅に向かうために路面電車に乗り込む人たちはボロボロのイサナくんにちょっとぎょっとしたようですが、運転手さん

が平然としていたので驚きの言葉を飲み込みました。イサナくんは駅のベンチで路面電車が折り返し駅へ戻って行く後ろ姿をしばらく眺めていました。路面電車の音が街の心音に聞こえました。



家に帰ったイサナくんをハンスさんとあけみさんは暖かく迎えました。イサナくんは大学を辞めて、ハンスさんの下で事業を学び、あけみさんとともに鯨の歴史や文化についての勉強をはじめました。街やくじらのモニュメントの落書きも丁寧に洗い落としました。家や商店の壁は塗り直して全くわからないようになりましたが、モニュメントに落書きされたペンキはやはり少し残ってしまいました。ハンスさんは「これもモニュメントの一部だ」とイサナくんに言いました。イサナくんもそう思いました。

捕鯨反対運動はしばらくしてブームが去るようになりました。もちろんずっと続けている団体はありましたが、すでに捕鯨が過去のものとなっていたくじら街を標的にする事のばかばかしさに学生たちがやっと気づいたという事もあります。

その代わりくじら街を襲ったのがモータリゼーションの波です。人々は路面電車ではなく自家用車で自分の都市にある会社や工場へ向かうようになりました。かつて盛んだった漁業はすでに街の人たちを養うだけの規模ではなく、くじら街はこの頃大都市のベッドタウンの位置づけとなっていました。人々の生活時間もどんどん個人化が進み、一時間に一往復の路面電車では合わなくなって来たのでした。通勤の為に使う人たちが減って来て、路面電車を維持管理することが難しくなって来たのです。



ハンスさんは私財を投じて路面電車を守って来ました。ハンスさんの気持ちをよく理解していたイサナくん、いえもうこの頃には立派にハンスさんの片腕となっていましたからイサナさんですね、も全力でサポートして来ました。でもそれも限界になって来ました。イサナさんは断腸の思いで路面電車の本数を減らそうと提案しました。朝夕の通勤客向け以外の時間帯以外の本数を減らすのです。それでも経営としては焼け石に水ですが、何もやらないよりはましだと思いました。しかしハンスさんにとっては、その問題は一度直面してすでに結論が出ている問題でした。ハンスさんは「心臓の鼓動が減ると、街が弱る」と言ってその意見を聞き入れませんでした。代わりに自分たちが蓄えた老後資金をすべて会社に提供しました。

父の思いに応えようとイサナさんも知恵を絞りました。大学時代の同級生のついででウォーターフロント開発や、ショッピングセンターの誘致など色々な案を検討しました。捕鯨反対運動でくじら街に迷惑をかけたと悔いている昔の仲間がいろいろと骨を折ってくれたりもしました。しかし、いずれにもハンスさんは首を縦にふりませんでした。それはくじら街らしさがない、と。いつまでも鯨にこだわっているハンスさんに対してイサナさんは何度もいらだちをぶつけました。それでもハンスさんは決して折れませんでした。「くじら街は鯨の街だ。自分でないものにはなれない」と。イサナさんは自分の名前が日本語で鯨の古い呼び方だという事を思い出しました。あんなにいやだったのに自分は結局くじら街に戻ってここで生きている。ハンスさんの言葉にイサナさんは街の個性について真剣に考えはじめました。

ある日、テレビ局に勤めているイサナさんの大学時代の友達が、くじら街を取り上げた番組を作りたいと行って来ました。くじら街の歴史とイサナさん一家の歴史は、十分に鯨漁の歴史としての見応えがあると思ったのでした。捕鯨反対運動も別の局面を迎え、一時のヒステリー的なものから冷静に考えてみようという気運が生まれていました。その点でも、鯨反対運動で大きな被害を受けたくじら街は素材としての魅力は十分でした。

イサナさんは友達といっしょにその番組を作りました。あけみさんと一緒に勉強した鯨の歴史、日本の鯨文化のこと、そうして自分が辿って来た家族の歴史と思い。捕鯨反対運動に参加した恥ずかしい過去も残らず打ち明けました。

すでに私財も底を付き、路面電車の維持も限界に来ていました。車輛の老朽化の問題もあります。このままでは路面電車を廃業する日も近いでしょう。そうなれば、もうくじら街の心臓は止まってしまいます。路面電車や駅が刻んでいた場所や時間といった街のリズムもなくなり、何の特徴もないのっぺりとした大都市のベッドタウンになってしまうかもしれません。だったらこの番組は自分と家族と街の大切な記録となります。今さら隠し事などしても仕方がないのです。



イサナさんの決心はハンスさんにもあけみさんにも伝わりました。あけみさんが行って来た鯨の工芸品の教室に通っていた生徒さんやお客さんにも伝わりました。かつて捕鯨反対運動のさなかビラを配って理解を求めた街の人々にも伝わりました。街を上げてテレビ番組の制作に協力しようという空気が生まれました。テレビ番組制作者であるイサナさんの友達もその真剣さに一生懸命応えました。出来上がった番組はすばらしいもので、その年のドキュメンタリーの賞を受賞しました。

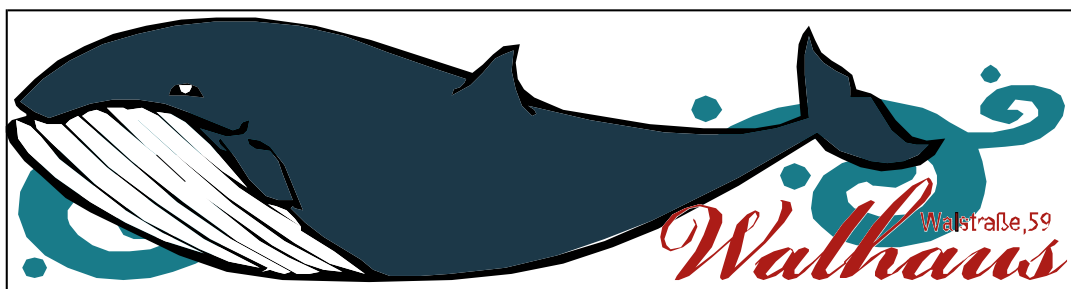
その後、奇跡が起こりました。街から人がでていくばかりだったくじら街に人が訪れるようになったのです。きっかけはそのテレビ番組でした。折からのエコツアーブームで身近な

土地の歴史を尋ねることに興味がある人々が反応したのです。定期運行をする路面電車はそんな観光目的の人々の便利な足となりました。また、街の歴史をなぞるように走る路面電車そのものが観光の目的となりました。あけみさんの「くじらの店」では記念の土産物を買求める人たちがひっきりなしに訪れるようになりました。また、ハンスさんやあけみさんから根気よくくじら街と捕鯨の歴史、そして鯨の文化を伝えられて来た街の人々は、観光客のどんな質問にもたいい応えられるようになっていました。観光客から質問されるのが楽しみでさらに勉強を深める人も出て来ました。そんなくじら街の人々の熱意が観光客にも伝わるのでしょう。くじら街は遊園地もショッピングセンターもないけれど、歴史のあるいい街だと口づてで人々に広まっていきました。路面電車の乗客は徐々に増えていきました。

＊

くじら街の路面電車は最悪の危機を乗り越えて今日も走っています。捕鯨反対運動が一時のブームだったように、このエコツアーも一時のことかもしれません。そうならないように、イサナさんは近隣の小学校の社会見学や遠足にくじら街を訪れてもらえるようにお役所に宣伝に行ったり、あけみさんの故郷である日本の鯨漁の街と文化交流を計画したりとさまざまな事を企画しています。ハンスさんとあけみさんは自分たちと街の歴史を本にまとめようと思っています。馬車から路面電車にかわったことも。くじら街を訪れる人たちのよい手引書となるように。

以上がくじら街とフィッシャーさんの路面電車のお話です。そうそう、おまけにもう一つ付け加えておきましょう。後に日本との文化交流がきっかけで、フィッシャー家にはイサナさんのお嫁さんとして美しい日本人が新たに加わる事になります。イサナさんが最初にその女性と打ち解けるきっかけになったのは「イサナは日本語で鯨なんですよ」という言葉でした。イサナさんの口調と表情から、彼は本当に自分の名前を誇りに思い愛しているのだなあ、とその女性は思ったそうですよ。



文・構成 柳原 望
レイアウト製作・写真 野中健一

2009 年 5 月 発行